

虫による皮膚炎

～ 夏に多い虫刺症 ～

夏になると皮膚科には「虫に刺されて痒い」と訴えられる患者さんが多くこられます。日常生活での虫刺されの原因としては、吸血性節足動物である**カ類、ノミ類、ブユ類、イエダニ類**がほとんどです。

ハチやムカデなどは、刺された瞬間に激しい痛みを伴うため、原因の推定は比較的容易ですが、刺された場面を見ていない場合には皮膚症状(発疹の分布や性状)や患者さんの生活様式や行動から原因を推定することになります。

虫刺されでみられる皮疹は、刺咬時に皮膚に注入される唾液腺物質に対するアレルギー反応によるものと考えられています。

大きく分けると即時型反応(15～30分後に反応が最大になる)と遅延型反応(24～48時間後に反応最大)に分けられますが、年齢によって反応が変化します。



ヒトスジシマカ

昼間吸血性で野外
特に庭などで吸血する。



即時型反応



遅延型反応

一般に乳幼児では強い遅延型反応を起こし、学童期以降では刺された直後にかゆみを伴う紅い斑状の皮疹が出現する即時型反応が認められます。その後はだいに反応が減弱し、高齢者では無反応の方もいます。

したがって、一 가족の中で子供だけが虫に刺されると訴えられることがよくありますが、これは家族が同一の環境に住み、同一の虫に刺されても幼児にのみ遅延反応が強く出てきて目立つ一方、親は無症状かあるいは短期間で消える即時反応のみで気付かない場合も多いからと考えられています。

刺される場所

一般的にカやブユは四肢の露出部、ノミは下腿～足、イエダニは腋周囲や陰股部などの被腹部を刺すことが多く、カやノミは室内や人家周囲、イエダニは室内(特に寝室)、ブユは高原や山間部の川沿いなどで被害にあうことが多いようです。

防虫スプレーは吸血性節足動物に対する忌避効果があるため、予防対策に有効と考えられます。しかし、幼児へ使用する場合、防虫スプレーの忌避効果成分(薬剤名:ディート=どの商品も共通)が原因で、中毒症状を起こす可能性があるため、特に注意する必要があります。

フユ



↓
メスのみが吸血する。



刺されて半日~1日後にかゆみ、紅斑、丘疹を生じることが多い。

チャドクガ

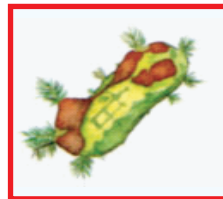


↓
患部に刺さる**毒針毛**をもつ。ツバキ・サザンカ等の家庭や学校の庭木に多く発生。



毒針毛に触れた直後から痒みを伴う紅斑、膨疹が出現、1~2日後に強いかゆみ、紅斑、丘疹を生じる。毛虫に触れた事に気づかない人も多い。

イラガ



↓
毒棘(どくきょく)をもつ。毒針と違い、患部には残らない。



触れた瞬間に電撃的な強い痛みがある。紅斑、膨疹が速やかに出現。通常は1~2時間で消退する。



有毒毛には毒針毛と毒棘(どくきょく)があります。それぞれ皮膚に触れた場合の症状は違います。

治療

刺された部位や刺された状態に関わらず、治療はいずれの場合も強めのステロイド外用剤を用います。短期間での使用なので、顔にも塗布することがあります。

刺された直後の対処として、患部を清潔に洗い、冷やすことが大事！

また、毒針毛をもつ毛虫の場合には、触れた直後に患部を掻くと毒針毛をより多く、より深く刺入させてしまうので、セロハンテープなどを用いて皮膚に付着した毒針毛をできるだけ除去した後、泡立てた石鹸で洗い流すことで皮膚炎を最小限に抑えることが出来ます。

刺された当日の入浴は短時間入浴(石鹸洗いもOK)なら問題ありません。しかし、飲酒は痒みが強くなるので出来るだけ避けるようにしましょう。

ステロイド内服薬の使用は、患部の腫れがひどい場合など(ハチ刺されなど)に短期間(3日程度)の服用をすることもあります。